

中学生の自律的な学習動機づけに及ぼす家庭環境の
影響：
父親の家庭関与に基づく夫婦関係に焦点をあてて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾形, 和男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8383

【論文】

中学生の自律的な学習動機づけに及ぼす家庭環境の影響

—父親の家庭関与に基づく夫婦関係に焦点をあてて—

尾形 和 男

愛知教育大学

要約

本研究は、父親の家庭関与に基づく夫婦関係が子どもの自律的な学習動機づけ形成に及ぼす影響について検討することを目的とした。そのために、334名の大学生が自分の中学時代の家庭の夫婦関係、父親と母親の自律的動機づけ、自律的支援、子どもの動機づけ特性、そして子どもの自律的動機の関連性を調べるために設定された質問紙に回答した。

共分散構造分析の結果次のことが明らかにされた。父親の場合には、夫婦関係が良好な場合父親の自律的動機づけが促進され、それが子どもの自律的動機づけを直接高めた。また、父親の自律的動機づけは子どもの動機づけ特性を促進し、それが子どもの自律的動機づけを高めることが確認された。さらに、夫婦関係の良好性は自律性支援を促進し、それが子どもの動機づけ特性そして自律的動機づけを高めることも示された。また、母親の場合は夫婦関係の良好性が母親自身の自律的動機づけを高め、それが自律性支援を介して子ども自律的動機づけを高めることが示された。同様に母親の自律的動機づけは子どもの動機づけ特性を介して子ども自律的動機づけを高めることも示された。さらには、父親の場合と同様に夫婦関係の良好性は自律性支援を促進し、それが子どもの動機づけ特性そして自律的動機づけを高めることも示された。以上のことから、父親の家庭関与に基づく夫婦関係が、中学生の自律的な学習動機づけに影響することが示された。

キーワード

自律的学習動機づけ、父親の家庭関与、夫婦関係、中学生

問題と目的

学業成績は中学生にとって重要な課題であり(Wigfield et al., 1997)、将来の進路を決定し、また成績によっては学校への適応問題として発展してしまう可能性があると考えられる。このような背景の中、中学生の学習に関して動機づけは学習への取り組み方や成績を左右する重要な位置づけを持つとされている。

動機づけは従来、外発的—内発的動機づけの相対する位置づけで捉えられ、扱われることがあった。しかし、最近動機づけは外発的動機づけから内発的動機づけへ変化する連続体として提唱されるようになり、動機づけそのものを高めるための方法について柔軟な捉え方が提唱されるようになっている。このような考え方は、Ryan & Deci (2000)による自己決定理論に示されている。それは、外発的動機づけは、自律性(自己決定性)に基づき、無動機、外的調整、取り入的調整、同一視的調整、内発的動機づけへの連続する発達の段階に区分されるが、この段階に基づいて無動機から内発的動機づけへ向けて次元上に連

続するものとして存在することを示している。内発的動機づけに向けた動機づけは子どもの自律的な意思による動機づけであり、動機づけが連続体として変化するものとして捉えれば、子どもの発達に伴って、動機づけが徐々に内発的なものに変化して行くことが教育上望ましいと考えられる。それは、子どもの動機づけを促進するための教育的な環境作りにも関わることである。

子どもの学習動機づけに影響を与える要因としては、学級を中心とする学校環境、友達関係、教師との関係、家庭環境など種々の要因が考えられる。これに関して従来は子どもの学習方略、学習コンピテンス、学業成績などとの関連で学校環境の中で論じられることが多かった。しかし、現実的な視点として、毎日の生活の基盤である家庭環境に論拠を置いた報告が見られる。それは、家庭の中にある書物、親の職業などを取り上げたものであるが、清水(2007)は小学校5年生、中学校2年生、高校2年生の理科の成績について、親の勉強への関与と家庭にある蔵書数について調べ、小学校では蔵書数と家庭の人の勉強への関わりが、中学校

と高校では蔵書数が影響するとしている。また、小学校児童の達成動機付けに親の職業、親の教育、家庭での学習促進が影響することを指摘した報告(Muola, 2010)が見られる。同様に、親のPTAや学校への参加、学校生活についての会話、宿題に対する援助、子どもの生活に関する関わりと子どもの学業達成に関する報告などがあげられる(e.g., Dearing, Kreider, Simpkins, & Weiss, 2006; Green, Walker, Hoover-Dempsey & Sandler, 2007; Epstein, 1989)。これらの研究は、家庭環境としての親の学習に対する関心などを中心に取り上げている。その一方で、親子関係の具体的な関わりの中に子どもの動機づけの要因を探る研究も見られるようになった。その多くは、母子関係あるいは母親と父親を含めた親子関係の中で親の関わり方に焦点を当てて、子どもの動機づけについて検討を加えていることが指摘できる(e.g., 高柳, 1994; 藤村・秋葉, 1998; 竹村・小林, 2008; 伊藤, 2009; 田中・中野, 2008; Pomerantz & Dong, 2006; 伊藤, 2009; Iyengar & Lepper, 1999; Green, Walker, Hoover-Dempsey, & Sandler, 2007)。

Ryan & Deci (2000) の提唱する自己決定理論には、関係性、自律性、自己有能感の3要素が必要であり、この3要素が機能することによって内発的動機づけが促進されるとしている。中でも自律性支援の重要性を指摘している。これに関して、子どもの自律的動機と親の自律性支援の関連性について検討が行われているが、Grolnick & Ryan (1989) は、小学校児童に対する家庭環境として親のどのような関わり方が学業成績に影響しているかを検討し、父親と母親の「自律性支援」と母親の「関与」が学業成績と関連していることを明らかにしている。同様にGrolnick, Ryan & Deci (1991) も小学校児童を対象にして明らかにしており、親の子どもに対する「自律性支援」の重要性が示されている。また、伊藤(2010)は幼児を対象とした調査から、親による「自律性支援」が幼児の動機づけ特性に積極的な影響を持つことを示した。さらに、Williams & Deci (1996)も教師による自律性支援行動についての生徒の認知が自律性と価値の内在化につながることを縦断的研究により示した。この指摘は学校を中心とする教育場面に関するものであるが、Grolnick & Ryan (1989) は、自律性支援への養育者の態度が学校での子どもの学業的価値の内在化へも影響を与えることを示し、親の自律的支援の重要性を指摘している。これに関連してPomerantz, Grolnick, & Price (2005)は教師と生徒との関係のみならず、家庭での親子関係にも着目している。一方、伊藤(2009, 2012)は大学生を対象とした調査からも、子どもとしての大学生の学習に対する動機づけには「自律性支援」を始めとする諸変数が影響していることを示した。同様に、尾形(2014)は中学生の学習コンピテンズと親の関与について検討を加え、親として子どもが勉強しやすい環境作り

や関わり方が子どもの学習に対する肯定的姿勢づくりには効果があることを指摘し、上記の一連の「自律性支援」の重要性を支持する結果を示している。

これら一連の研究から、幼児や児童の自律的動機づけの発達には親の「自律性支援」が重要であることが示されているが、上記の先行研究から、子どもの学習に対する動機づけには、親の子どもの自律的動機づけを伸ばすような関わりが重要であり、家庭環境としての親の「自律性支援」の重要性が指摘されている。自律的動機づけは、子ども自ら課題に取り組むことを楽しむ側面を示すものであり、「自律性支援」は本来子どもの持っている興味や関心に基づき、やる気そのものを引き出し子どもが主体的に取り組むように方向づける作用であると言える。

子どもの自律的動機づけの内在化過程に関して見ると、親自身の自律的動機づけの在り方が基本的には重要であることが指摘されている(伊藤, 2010)。このことに関してWild & Enzle (2002)は、学習者は教授者の持つ動機づけを自己への期待として受け取り、学習者自身の動機づけの影響を受けるとしている。また、伊藤(2009, 2012)は、父親・母親の自律的動機づけを基本とする調査から自律性支援行動を中心とする行動が子どもの自立的動機づけ内在化プロセスに関連することを明らかにし、親の持つ自律的動機づけが自律性支援そして子どもの自律的学習動機づけ形成に強く影響していることを指摘している。

さらに、子どもの動機づけは子どもの行動として出現するが、それは、いろいろなものに関心を持って取り組んだり、諦めず最後までやろうとしたり、場合によってはすぐにやる気を喪失したりという種々の行動特徴として確認される。このような動機づけ特性としての行動傾向は子どもの中に形成される動機づけに大きく影響すると考えられる。動機づけ特性そのものがどのように形成されるかに関して先行研究はほとんどない。遺伝的な気質により子どもは生まれながらにして存在するのかどうかについてはChess & Tomas (1959)とThomas & Chess (1977)が少々検討した程度であるとされている(陳, 1996)。しかし、伊藤(2009)は、親の自律的動機づけは子どもの自律的動機づけに影響することを明らかにしたうえで、親の自律的動機づけと子どもの動機づけ特性との関連性を検討し、有意な正の相関を持つことを示し、親の関わり方が子どもの動機特性形成にも影響していることを示している(伊藤, 2010)。つまり、子どもの自律的動機づけと動機づけ特性は強い関連性を持つことが示されているが、動機づけ特性は自律的動機づけに影響するものと推測される。

子どもの発達・適応に及ぼす親の影響力について見た場合、子の精神的な発達に親の関わりが重要であることは従来の多くの先行研究から明らかにされている。しかしその多くは母子関係や父子関係を主とする親子関係にのみ焦点を当てており、子どもが時間を多く費やす家庭の中の親

子関係の実情を十分に反映していないと考えられる。何故なら子どもを取り囲む家庭は、父親・母親、兄弟などのメンバーから成り、お互いに影響を受けて変化し、それがまた異なる形で相手に影響をもたらすなど、家族は常に成員相互の関わりの中でシステムとして複雑に変化し続けているからである。特に、子どもが誕生した時から家族は夫婦がその中心として存在し、家族の状況を形成し、子どもはその中で多くの影響を受けて成長している。幼児期・児童期・青年期などライフステージに応じて家族に生じる課題などは変化するが、子どもの成長に伴って親も子ども自身からの影響を受けながら、少なくとも夫婦間の調整をたゆまず継続することによって家族としての特色である家族機能を形成し、その中で子どもは影響を受け続けていることにもなる。このような、夫婦関係を中心とした家族の変化とそれに基づく子どもの発達・適応について、家族システムの視点から検討を加えた報告が見られるようになった(e.g., Lindahl, Howes, & Markman, 1988; 平山, 2001; 尾形・宮下・福田, 2005; Flouri & Buchanan, 2003; 大島, 2009; 尾形, 2014)。家族の在り方は夫婦関係がその核となり、特にコミュニケーションを媒介とする過程が重要である(Satir, 1964)との指摘にあるように、子どもの発達・適応について夫婦関係を基本とした家族システムの中で捉える視点は現実的である。

子どもの自律的動機づけを促進するための自律性支援の有効性を父子関係、母子関係の基本的軸の中に見ると、父親あるいは母親が子どもに対して持つ自律性支援行動が父親と母親からそれぞれ発現される際に、その発現基盤として夫婦としての子育てへの関心の集約など相互のやり取りが不可欠である。つまり、システムとしての家族はまず、夫婦間の子どもに対する期待やそれに基づく子育てに対する意見調整を図り、それに基づいて父親あるいは母親(場合によっては両親揃って)が子どもに対して行動を発することになると考えられる。したがって、夫婦間の子どもに関する意見調整が十分に行われ子育てに期待が高まる場合ほど母親と父親の子どもへの動機づけが強まり(あるいは弱まり)、それに基づく自律性支援行動も効果を発揮することになると推測される。そのことがさらに、子どもの自律的動機づけに影響をもたらすと考えられる。このように考えると、従来の親子関係に要因を求める報告では、家族システムとしての夫婦関係を基盤とする現実的な視点が十分に扱われていないことが指摘できる。

また、親子関係に関しては、母親の方が子どもとの関わりが多いことが指摘されているが、これはライフステージの種々の段階において共通したこととして指摘されている。特に、青年期は親との距離が遠くなる傾向があり、その中でも特に父親との距離が大きくなることが指摘されている(eg., 川島, 2005; 佐藤・佐々木, 2007; Shulman & Seiffge-Krenke, 1997)。このことは相対的に父親として

の影響力が減少すると推測されるのであるが、父親が家庭へ関与を持つ場合には子どもの攻撃性、抑うつ、非行、引きこもり、学業成績などにも影響力を持つことも併せて指摘されており(eg., Adams & Laursen, 2007; Chen, Liu, Li, 2000; 酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村, 2002)、結果として学校生活にも影響をもたらすことが示されている。特に、学業成績への影響については学校適応の問題と大きく関連している側面が強いと思われる。

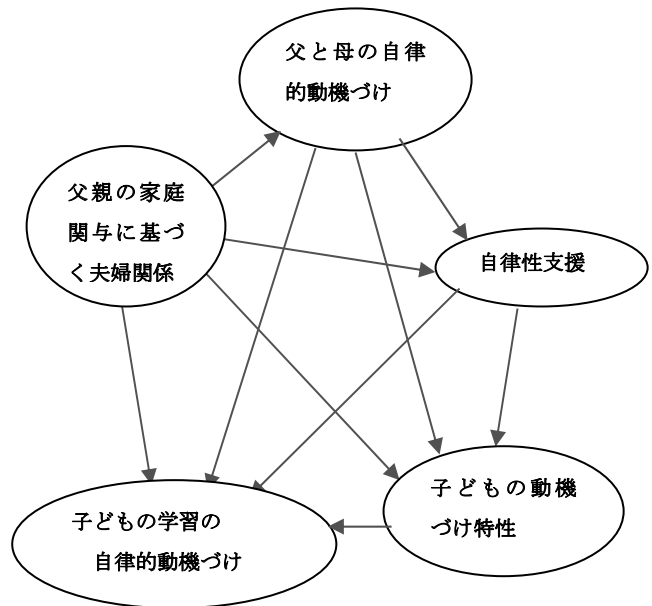


Figure1 中学生の動機づけ特性・自律的動機づけと、夫婦関係・父親・母親・自律性支援についてモデル図

本研究では、以上のことを基にして、中学生の家庭について、父親の家庭関与に基づいた妻や子どもとの関わりに基づく夫婦関係が、父親と母親の子どもの学習についての自律的動機づけ、両親の自律性支援、子どもの動機づけ特性そして学習についての自律的動機づけに及ぼす影響について Figure1 に基づいて探索的に検討することを目的とする。特に、子どもの自律的動機づけを連続的に発達するものとして位置づけ、親の自律的動機づけ(外的調整、取り入的調整、内発的動機づけ)を取り上げる。ここで取り上げる父親の家庭関与は、夫婦としてのコミュニケーションに基づく関わりと同時に、子どもの学習への関心と夫婦間の意見調整そして子どもへの関わりに関連する内容を示す。

方法

1. 調査対象

中学2年生の頃の夫婦関係と自己に対する親の自律性支援状、自分の学習に対する動機づけなどについて分析を加えることを目的として、大学生からみた状況を中心とするために、愛知県、静岡県内の国立・私立大学生 334 名を

対象とした(男子159名、女子175名、学部学生1年生148名、2年生107名、3年生66名、4年生11名、大学院修士課程1年2名)。平均年齢19.22歳(標準偏差値1.19)。

中学2年生を調査対象として取りあげたのは、教科がより専門的になると同時に高校進学を中心とする受験を徐々に意識し、自分の意志に基づいて勉強に取り組むことが求められる時期に移行しつつあり、より動機づけに基づいた行動へと変化すると考えられるからである。

2. 調査用紙

(1) 学生の学年、性別、年齢を問う質問項目。

(2) 家庭の夫婦関係についての尺度: 諸井(1997)を参考に、子どもの養育のことに含まれた。15項目よりなる(以下調査用紙は全て4段階評定である)。

(3) 父親・母親の子どもに対する自律的動機づけについての尺度: (廣森, 2006)による、外的調整・取入れ的調整・同一視的調整・内発的動機づけの4段階を測定する質問紙。各3項目計12項目からなる。

(4) 両親の自律性支援についての尺度: 伊藤(2010)を参考に一部表現を変えて作成した。3項目よりなる。両親の子どもに対する自律性支援については、次の項目を用いた。
①あなたが自分から進んで物事に取り組めるように支えてくれた。
②できるだけ自分の力で物事に取り組めるようにあなたを促した。
③何かを選んだり、決めたりするときにはできるだけあなたに任せるようにした。

(5) 子どもの動機づけ特性についての尺度: 伊藤(2010)を用いた。項目は①自分は好奇心の強い方だと思う。②自分は集中力のある方だと思う。③自分はあきっぽい方だと思う。の3項目。

(6) 子どもの学習に対する自律的動機づけについての尺度: 伊藤(2010)を参考に作成。外的調整・取入れ的調整・同一視的調整・内発的動機づけの4段階を測定する質問紙。各3項目合計12項目からなる。

3. 調査時期

2014年7月

各大学において講義を通して説明し、協力してくれる学生に配布し、その場で記入してもらい回収した。

結果

1. 夫婦関係を測定する質問紙の構造化

夫婦関係の構造を明らかにするために15項目について主因子法による因子分析を行った。固有値の減衰率から3因子を採用し、プロマックス回転を行った。結果をTable 1に示す。第1因子は項目6(父親と母親は一緒に行動することがよくあった)、項目8(夫婦そろってよく出かけることがあった)、項目2(母親は父親を頼りにしていた)、項目1(父親は母親とよく話をしていた)などの項目の負荷が高く、夫婦間のつながりの強さを示しているので「妻の夫への信頼と夫婦の絆」と命名した。第2因子については項目12(父親はあなたの将来のことについて話し合うことがあった)、項目11(父親はあなたの話をよく聞いてくれた)、項目13(父親はあなたの学校のことについて聞くことがあった)、などの項目の負荷が高く、自分の子どものこのことについての関心を示しているので「夫の子への関心」と命名した。第3因子は項目15(父親はあなたの成績のことに気を遣うことがあった)、項目14(父親はあなたの成績のことについて気にすることがあった)、項目3(子どもの勉強のことで、父親と母親はよく話をしていた)などの負荷が高く、子どもの成績のことについての配慮とそれに関する夫婦での話し合いを示していると考えられるので「成績についての子どもや妻との会話」とした。質問項目の信頼性についてはそれぞれ $\alpha = .905, .875, .815$ であり、十分な信頼性を有していることが確認された。

Table1 夫婦関係についての因子分析結果(主因子法 Promax回転後)

項目	F1	F2	F3
F1:妻の夫への信頼と夫婦の絆($\alpha = .905$)			
6.父親と母親は一緒に行動することがよくあった	.852	.067	-.104
8.夫婦そろってよく出かけることがあった	.821	.010	-.119
2.母親は父親を頼りにしていた	.791	-.022	.062
1.父親は母親とよく話をしていた	.768	.071	-.039
7.父親は母親を大切にしていた	.723	.171	-.116
5.母親は父親によく相談することがあった	.714	-.105	.184
4.父親は母親によく相談することがあった	.583	-.088	.271
10.子どもの勉強のことについて、父親と母親は同じ考え方だった	.415	.254	-.035
F2:夫の子への関心($\alpha = .875$)			
12.父親はあなたの将来のことについて話し合うことがあった	.030	.791	.097
11.父親はあなたの話をよく聞いてくれた	.121	.767	-.040
13.父親はあなたの学校のことについて聞くことがあった	-.018	.705	.214
F3:成績のことについての子どもや妻との会話($\alpha = .815$)			
15.父親はあなたの成績のことについて気を遣うことがあった	-.082	.118	.794
14.父親はあなたの成績のことについて気にすることがあった	-.107	.179	.789
3.子どもの勉強のことについて、父親と母親はよく話していた	.416	-.159	.554
因子相関	F1		
	F2	.527	
	F3	.496	.527

2. 父親・母親の子どもに対する自律的動機づけ

父親・母親それぞれの子どもに対する自律的動機づけについては、内発的動機づけに至る4段階を測定尺度として用いたが、それぞれの動機づけ各3項目について信頼性を確認するために α 係数を算出した。

外的調整については、①良い成績を取るために必要と言っていて励ました。②勉強することは決まりのようなものだからといって励ました。③勉強しなければならない社会だからといって励ました。の3項目であり、母親と父親はそれぞれ、.809, .877であった。

取入れ調整については、①勉強しておかないと、後で後悔するからと言って励ました。②勉強できることは周りから見ても良いことだからと言って励ました。③勉強ぐらいできるのは、普通だからと言って励ました。の3項目であり、それぞれ、.717, .766であった。

同一視的調整では、①将来使えるような技能や知識を身に着けることができると言って励ました。②自分にとって必要なことだと言って励ました。③自分の成長にとって役立つからと言って励ました。であり、それぞれ、.845, .897であった。

さらに、内発的動機づけについては、①勉強は楽しいことだからと言って励ました。②勉強には新しい発見があると行って励ました。③勉強によって知識が増えることは楽しいことだと言って励ました。であり、それぞれ、.886, .918であった。

以上のように、父親・母親の自律的動機づけに関する質問紙は、各段階ともに高い信頼性を有していることが確認された。これに基づいて、それぞれ3項目の加算平均をもって下位尺度得点とした。

3. 親の自立性支援と子どもの動機づけ特性について

親の子どもに対する自立性支援については次の3項目を用いた。①あなたが自分から進んで物事に取り組めるように支えてくれた。②できるだけ自分の力で物事に取り組めるようにあなたを促した。③何かを選んだり、決めたりするときにはできるだけあなたに任せるようにした。 α 係数は.770であった。

また、子どもの動機づけ特性については①自分は好奇心の強い方だと思う。②自分は集中力のある方だと思う。③自分はあきっぽい方だと思う。(逆転項目)

それぞれ3項目の加算平均をもって下位尺度得点とした。

4. 子どもの学習に対する自律的動機づけについて

子どもの自律的動機づけについては、内発的動機づけに至る4段階を測定尺度として用いたが、それぞれの段階の動機づけ3項目について信頼性を確認するために α 係数を算出した。

外的調整については、①周りにやれと言われるので取り組んでいた。②家族のためだから取り組んでいた。③周りがあるさから取り組んでいた。の3項目であり。 α 係数は.793であった。

取入れ調整については、①いろいろ困ることがあるので取り組んでいた。②しなければならないことだから取り組んでいた。③不安に思うから取り組んでいた。の3項目であり、 α 係数は.710であった。

同一視的調整では、①大切なことだと思うから取り組んでいた。②意義があると思うので取り組んでいた。③大事だと思うから取り組んでいた。であり、 α 係数は.888であった。

さらに、内発的動機づけについては、①面白いと思って

Table2 父親の動機づけ

	内発的動機づけ	同一視的調整	取入れ調整	外的調整
内発的動機づけ		.72**	.516**	.493**
同一視的調整			.680**	.631**
取入れ調整				.801**
外的調整				

** $p < .01$

Table3 母親の動機づけ

	内発的動機づけ	同一視的調整	取入れ調整	外的調整
内発的動機づけ		.569**	.457**	.322**
同一視的調整			.633**	.557**
取入れ調整				.753**
外的調整				

** $p < .01$

Table4 子どもの動機づけ

	内発的動機づけ	同一視的調整	取入れ調整	外的調整
内発的動機づけ		.491**	.201**	-.027
同一視的調整			.552**	-.038
取入れ調整				.256**
外的調整				

** $p < .01$

取り組んでいた。②自分がしたいことだから取り組んでいた。③楽しいから取り組んでいた。の3項目であり、 α 係数は.898であった。これに基づいて、それぞれ3項目の加算平均をもって下位尺度得点とした。

以上のように、子どもの自律的動機づけに関する質問紙は、各段階ともに高い信頼性を有していることが確認された。

5. 父親・母親・子どもの自律的動機づけに関する検討

Ryan & Deci (2000) は、動機づけは無動機、外的調整、取り入れの調整、同一視的調整、内発的動機づけへの連続する発達の段階に区分されるとしているが、本研究で扱う、父親、母親、子どもの動機づけについて確認する。

ここでは、外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整、内発的動機づけの4段階を使用した。各段階に含まれる下位項目の平均得点を算出し、父親、母親、子どもごとに各段階の積率相関係数を算出した。下位尺度間の相関については、隣り合う動機づけ間では相関が高く、隔たるとつれて相関が低くなり、無相関か負の相関になるという相関パターンの存在が指摘されているが(eg., Grolnick & Ryan, 1987; Ryan & Connell, 1989)、Table2、Table3、Table4 から父親・母親・子どもそれぞれについて、外的調整、取り入れ的調整、同一視的調整、内発的動機づけの各段階ともに、父親と母親については無相関または負の相関が確認されなかったものの、発達の近い段階の動機づけの相関が高く、離れている段階ほど相関が低くなっていることが示され、外的調整から内発的動機づけに至るまでの構造化が確認された。

6. 夫婦関係、親・母親の自律的動機づけ、自律性支援と子どもの動機づけ特性、学習に対する自律的動機づけの関連

ここで、基本となる夫婦関係を基として、研究で取り上げた諸変数間の関連性を検討するために、積率相関係数を求めた。具体的には、各項目の平均得点を算出し、夫婦関係、自律性支援、子どもの動機づけ特性、子どもの自律的動機づけ、親の自律的動機づけ間の相関係数を算出した。なお、ここで指摘した自律的動機づけについて、自律性の程度を示すために先行研究に基づいて(eg., Grolnick & Ryan, 1987; 岡田, 2005.)、Relative Autonomy Index (RAI) を算出した。RAI は、 $2 \times (\text{内発的動機づけ得点}) + 1 \times (\text{同一視による調整得点}) - 1 \times (\text{取り入れによる調整得点}) - 2 \times (\text{外的動機づけ得点})$ により算出した。

Table5 に示したように、子どもの自律的動機づけは夫婦関係を除いた他の変数と有意な正の相関を示していることが確認された。しかし、夫婦関係は他の変数と有意な正の相関を示しており、夫婦関係は子どもの自律的な動機づけとは直接的な関連性を有しないものの、間接的な関連性を有している可能性を示しているものと考えられる。動機づけ特性についても夫婦関係を除いた他の変数と有意な正の相関を示していることが確認された。

また、子どものRAIは父親と母親のRAI、親の自律性支援、子どもの動機づけ特性と有意な正の相関を示しており、両親の動機づけとそれに基づく自律性支援の関連性が示された。

7. モデルの検討

次に、今回取り上げたモデルについて検討を加える。Figure1に基づいて夫婦関係を中心とする家庭環境が子どもの自律的動機づけに及ぼす影響について、共分散構造分析を用いて検討を加えた。ここでは、父親と母親の影響力を分けて検討することにした。

Figure2より、父親の場合について見ると、夫婦関係から父親の自律的動機づけに正の有意なパスが示され、さらに子どもの自律的動機づけに有意な正のパスが示された。また、父親の自律的動機づけからは子の動機づけ特性に有意な(傾向)正のパスが、そこからさらに子どもの自律的な動機づけに有意な正のパスが確認された。一方、夫婦関係からは自律性支援に有意な正のパスが、そこから子どもの動機づけ特性に有意な正のパスが示され、さらに子どもの自律性動機づけに有意な正のパスが示された。

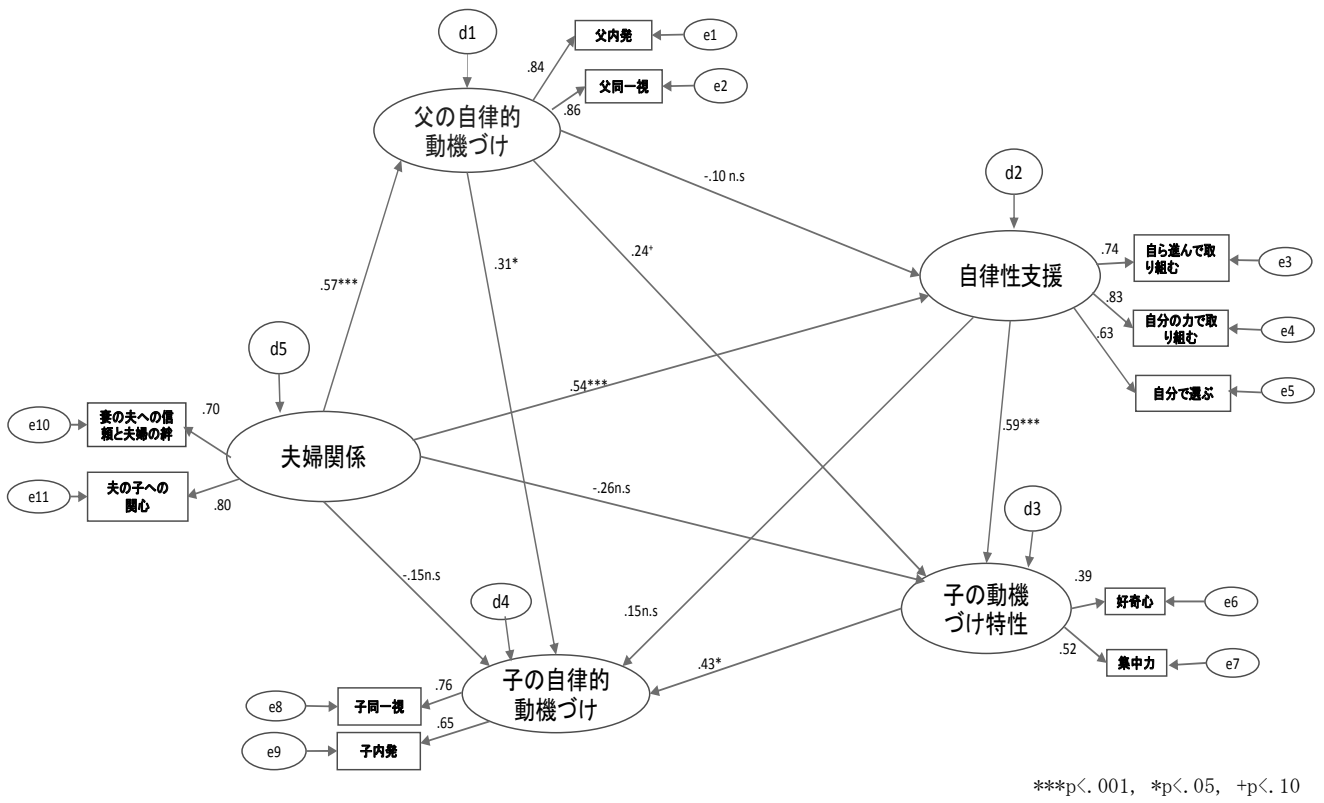
以上のように、父親の場合には、「夫婦関係」→「父親の自律的動機づけ」→「子どもの自律的動機づけ」の流れと、「夫婦関係」→「父親の自律的動機づけ」→「子どもの動機づけ特性」→「子どもの自律的動機づけ」の流れが確認された。また、「夫婦関係」→「自律性支援」→「子どもの動機づけ特性」→「子どもの自律的動機づけ」の流れも確認された。

次に、母親についてはFigure3に示されるように、夫婦関係から母親の自律的動機づけに正の有意なパスが示され、さらに子の動機づけ特性に有意な(傾向)正のパスが、そこからさらに子どもの自律的な動機づけに有意な正のパスが確認された。さらに、母親の自律的動機づけから自律性支援にも有意な(傾向)正のパスが確認され、そこから子どもの動機づけ特性を介して子どもの自律的動機づけ

Table5 夫婦関係、父親のFAI、母親のFAI、自律性支援、子の動機づけ特性の関連

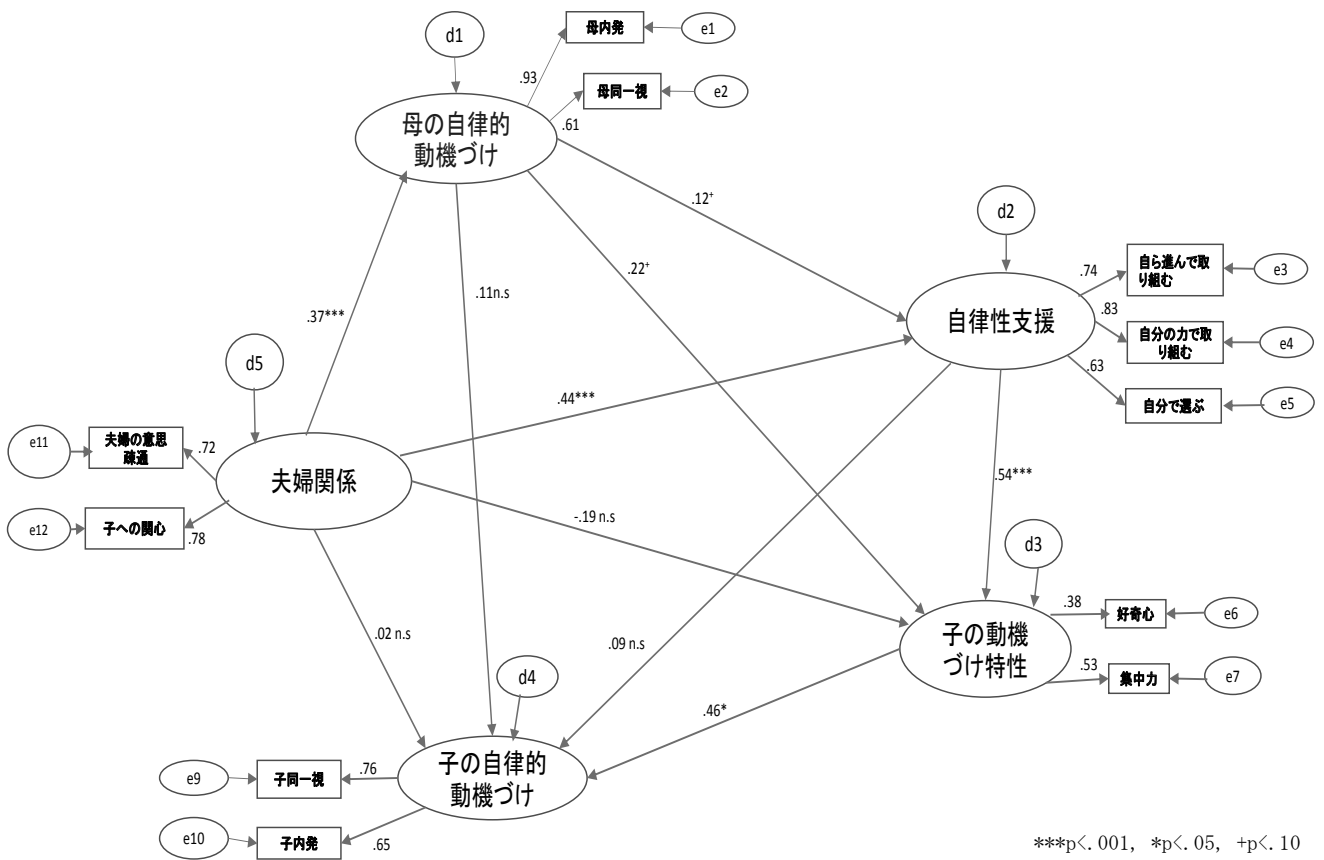
	夫婦関係	父のRAI	母のRAI	自律性支援	子の動機づけ特性	子のRAI
夫婦関係						
父のFAI	.119*					
母のFAI	.132*	.525**				
自律性支援	.311**	.157**	.309**			
子の動機づけ特性	.036	.146**	.164**	.237**		
子のFAI	-.053	.206**	.240**	.320**	.239**	

** $p < .01$, * $p < .05$



$\chi^2=45.685, df=34, CFI=.988, RMSEA=.032, AIC=131.685$

Figure2 夫婦関係と父親の自律的動機づけ,子の自律的動機づけ



$\chi^2=67.108, df=34, CFI=.959, RMSEA=.054, AIC=153.108$

Figure3 夫婦関係と母親の自律的動機づけ,子の自律的動機づけ

に有意な正のパスが示された。一方、夫婦関係からは自律性支援に有意な正のパスが、そこから子どもの動機づけ特性に有意な正のパスが示され、さらに子どもの自律的動機づけに有意な正のパスが示された。

以上のように、母に関しては「夫婦関係」→「母の自律的動機づけ」→「子の動機づけ特性」→「子どもの自律的動機づけ」の流れが確認された。また、「夫婦関係」→「母の自律的動機づけ」→「自律性支援」→「子どもの動機づけ特性」→「子どもの自律的動機づけ」の流れも確認された。一方、「夫婦関係」→「自律性支援」→「子どもの動機づけ特性」→「子どもの自律的動機づけ」の流れも確認された。

考察

中学生の自律的動機づけに影響を与える家庭環境として、父親の家庭関与に基づく夫婦関係を基盤とする視点から検討を加えた。

モデル図に基づく視点から見て、影響力の基盤として位置付けた夫婦関係は直接的に子どもの自律的動機づけ形成に影響は示さないものの、父親・母親の自律的動機づけ形成に影響をもたらす、そこから子どもの自律的動機づけ、あるいは子どもの動機づけ特性を介して自律的動機づけ形成に影響をもたらしていることが確認された。その一方で、夫婦関係そのものが自律性支援を介して、子どもの動機づけ特性、そして自律的動機づけへと影響をもたらすことも確認され、夫婦関係のもたらす影響が示されたと言える。このことは、特に従来の報告に見られるように、父親と母親を別々に扱い、それぞれからの愛着や親密性などの特性に焦点を当てて、子どもの自律的動機づけの促進要因について検討を加えた報告(eg., Pomerantz, Grolnick, & Price, 2005; 伊藤, 2009)に新しい視点をもたらすと考えられる。それは、今回の結果からも示されているように、夫婦関係あるいは母親は「自律性支援」を介して子どもの自律的動機づけに間接的な影響をもたらしている。「自律性支援」は基本的に子どもの自主性を重視した立場に立った関わりを示しており、子どもに対する親としての厳しさや親密さを含む概念であり、親から直接的に提示される態度であると同時に、それ以上に夫婦の子どもに対する基本方針などの調整に基づいて出現する部分も多分に含むと考えられるからである。つまり、夫婦間のやり取りが大きく影響していると考えられる。

父親と母親のそれぞれの結果については、父親は自己の自律的動機づけが直接子どもの自律的動機づけを促進する一方、父親・母親共に子どもの動機づけ特性を介して子どもの自律的動機づけを促進し、基本的に類似した結果を示している。しかし、母親では父親と異なり、自己の自律的動機づけに基づいて子どもの動機づけ特性を形成し、それが子どもの自律的動機づけを促進する一方、さらに自律

性支援を行い、それが子どもの動機づけ特性を介して子どもの自律的動機づけに間接的に影響をもたらす面も見られ、子どもの動機づけ特性を促進する方向での関わりが多く、父親よりも間接的で広い影響力を持つとも言えよう。この結果は、両親の自律的動機づけと子どもの学習観、自己効力感、自律的動機づけとの関連について、父親よりも母親の自律的動機づけが子どもの学習観の在り方を規定している(伊藤, 2011)とする報告の一部を支持すると考えられる。母親の影響力の幅については、子どもとの関係が子どもの誕生した時から父親以上に強く、中学生を中心とした思春期は父親よりも母親が子どもの相談相手としての関係性が強いことも指摘されている(Shulman, S., & Steiffge-Krenke, I. 1997) こともあり、それだけ幅広く影響し得るとも考えられる。しかし、本研究では父親の自律的動機づけは子どもの自律的動機づけに母親以上に直接的に強く影響していることも示されており、悩みの内容によっては父親からの直接的な影響力の方が強くなることもあり得ると考えられる。本研究では学習に対する自律的動機づけに関して父親の直接的影響力が認められたが、子どもの発達段階や悩みの内容によって母親・父親と子どもとの関係も変化し、父親に求められる期待や役割に変化が生じているとも考えられる。このような視点も含め、今後ともさらにその要因について検討する必要がある。

今回用いた父親・母親・子どもの自律的動機づけを測定する質問紙について、子ども用に関しては下位尺度間の相関について、隣り合う動機づけ間では相関が高く、隔たるにつれて相関が低くなり、無相関か負の相関になるという相関パターンが存在(eg., Grolnick & Ryan, 1987; Ryan & Connell, 1989) が確認されたが、父親と母親では、無相関と無相関が確認されなかった。これは、子どもと親とでは、学習に取り組むための視点が異なることが要因と考えられる。つまり、中学生は徐々に進学のことやそれに基づく将来の職業などについて漠然とした意識を持ち始めると同時に、学習によって自分を認めてもらうことや競争あるいは目標到達に意識を向けて取り組むといったように、徐々に学習の必要性を意識して行く面が強いために親からの指示や言葉がけの微妙な差異が大きな影響力を持つと考えられる。それに反し、親の場合には勉強させる立場としての意識が優先されがちになり、特に内発、同一視、取入れ、外的のそれぞれの調整にこだわらずに言葉がけしている面もあると推測される。このように、子どもと親の勉強に取り組むについての意識の違いが要因として存在することも推測される。しかし本来的には、外的調整から内発的動機づけへと徐々に高い自律的動機づけへと変化していくことが、教育的視点から見て必要と考えられる。今回の親に関する結果は、用いた質問紙の特性にもよると考えられるが、より段階的に詳細に検討する必要がある。

また、子どもの自律的動機づけに影響を与える要因の一

つとして子どもの動機づけ特性を影響指標として取り上げた。動機づけ特性は動機づけの傾向(桜井, 2009)として、行動の傾向を表すものと考えられ、自律的動機づけに影響を及ぼすと予測し、基本的には親の影響を受けて動機づけを左右すると考える立場からモデル図に組み込んでその流れを示したが、父親・母親ともにその流れが確認された。父親・母親の自律的動機づけと自立性支援行動によって子どもの動機づけ特性が育成される過程が示されたと考える。これは、自律的動機づけの内在化と形成に関わるプロセスの一端を示す結果とも考えられる。しかし、内在化のプロセスの一端を示すものであるのかを明らかにするためには発達の視点から低年齢の幼児、児童のプロセスについての検討も求められる。

さらに、今回の研究は適切的な視点から大学生を対象として中学生時代の父親と母親の様子と、自己の勉強に対する姿勢を回想法により調査したものである。過去の記憶による回答は内容が不正確になる可能性もあるので、今後は中学生とその親に直接質問し、より現実的な視点から分析を行うことも必要である。同時に、今回使用した共分散構造分析のモデルは一つの結果を示すが、他にもモデルの存在の可能性があり、他のモデルとの対比に基づいた検討が不可欠である。

引用文献

- Adams, R.E., & Laursen, B. 2007 The Correlates of Conflict: Disagreement Is Not Necessarily Detrimental. *Journal of Family Psychology*, 21(3) .445-458.
- Chen, X., Liu, M., & Li, D. 2000 Parental Warmth, Control, and Indulgence and Their Relations to Adjustment in Chinese Children: A longitudinal Study. *Journal of Family Psychology*, 14(3) .401-419.
- Chess, S. & Thomas, A. 1959 The Importance of Nonmotivational Behavior Patterns in Psychiatric Diagnosis and Treatment *Psychiatric Quarterly* 33:326.
- 陳 恵貞 1996 幼児の「内発的動機づけ傾向」尺度の作成と検討 -気質質問紙BSQを基にして- *Bulletin of School of Education, Nagoya University (Educational Psychology)* , 43, 231-241.
- Dearing, E, Kreider, H., Simpkins, S., & Weis, H.B. 2006 Family involvement in school and low-income children's literacy: Longitudinal associations between and within families. *Journal of Educational Psychology*, 98, 653-664.
- Epstein, J. 1989 Family structure and student motivation: A developmental perspective. (In C. Ames & R. Ames (Eds.), *research on motivation in education*, v. 3: *Goals and cognitions*. New York: Academic Press.)
- Flouri, E., & Buchanan, A., 2003 The role of father's involvement in children's later mental health. *Journal of Adolescence*, 26, 63-78.
- 藤村美子・秋葉英則 1998 親子関係認知と承認欲求、達成動機との関わりについて 大阪教育大学紀要 第IV部門 第46巻第2号, 168-179.
- Green, C.L., Walker, J.M.T., Hoover-Dempsey, K.V., & Sandler, H.M. 2007 Parents' motivations for involvement in children's education: An empirical Test of a theoretical model of parental involvement. *Journal of Educational Psychology*, 99, 532-544.
- Grolnick, W.S., & Ryan, R.M. 1987 Autonomy in children's learning : An experimental and individual difference investigation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 890-898.
- Grolnick, W.S., & Ryan, R.M. 1989 Parent styles associated with children's self-regulation and competence in school. *Journal of Educational Psychology*, 81, 143-154.
- Grolnick, W.S., Ryan, R.M., & Deci, E.L 1991 Inner resources for school achievement: Motivational mediators of children's perceptions of their parents. *Journal of Educational Psychology*, 83, 508-517.
- 平山聡子 2001 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連-父母評定の一致度からの検討- *発達心理学研究*, 12, 99-109.
- 廣森友人 2006 外国語学習者の動機づけを高める理論と実践 多賀出版
- 伊藤忠弘 2009 大学生の親子関係の認知と親からの期待・プレッシャー経験 -他者志向的動機づけを規定する要因の予備的分析- *The AGU Journal of Psychology*, 9, 11-22.
- 伊藤崇達 2009 親の動機づけスタイル、動機づけスタイルと子どもの自律的動機づけの関連 *Human Developmental Research*, 23, 201-208.
- 伊藤崇達 2010 動機づけの内在化プロセスの検証 -親の自律的動機づけ及び支援のあり方に着目して- *Human Developmental Research*, 24, 1-12.
- 伊藤崇達 2011 子どもの自律的学習と動機づけの内在化プロセスを促す家庭環境のあり方の検証 *科学研究費補助金研究成果報告書*
- 伊藤崇達 2012 親によるいかなる動機づけ支援が子どもの自律的学習を支えているか *日本教育心理学会第54回総会発表論文集*, 60.
- Iyengar, S.S. & Lepper, M. 1999 Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic

- motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 349-366.
- 川島亜希子 2005 家族成員による夫婦間葛藤の認知と子どもの家族機能評価との関連-中学生とその家族を対象に- 発達心理学研究, **16**(3), 225-236.
- Lindahl, K. M., Howes, P. W., & Markman, H. J. 1988 Exploring links between marital communication, parental-child interactions, and the development of empathy. Poster presented at the Meeting for the Association for Advancement of Behavior Therapy, New York.
- 諸井克英 1997 子どもの眼から見た家庭内労働の分担の平衡性 - 女子学生の場合 - 家族心理学研究, **11**, 69-81.
- Muola, J. M. . 2010 A study of the relationship between academic achievement motivation and home. Environment among standard eight pupils. *Educational Research and Reviews* ,**5**, 213-217.
- 岡田 涼 2005 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討 - 自己決定理論の枠組みから- パーソナリティ研究, **14**, 101-112.
- 尾形和男 2014 中学生の家庭の目標構造が友人関係、学習方略そして学習コンピテンスに及ぼす影響 教科開発学論集, **2**, 31-41.
- 尾形和男・宮下一博・福田佳織 2005 父親の協力的関わりと家族成員の適応-母親役割・妻役割、子どもの攻撃性、父親のストレス・コーピングとの関係- 家族心理学研究, **19**, 31-45.
- 大島聖美 2009 妻から夫への信頼感が青年期後半の心理的健康に与える影響発達心理学研究, **20**(4), 351-361.
- Pomerantz, E. M., & Dong, W. 2006 Effects of mothers' Perceptions of children's competence: The moderating role of mother's theories of competence. *Developmental Psychology*, **42**, 950-961.
- Pomerantz, E. M., Grolnick, W.S., & Price, C.E. 2005 The role of parents in how children approach achievement: A dynamic process perspective. In A. J. Elliot, & C. S. Dweck (Eds.), *Handbook of competence and motivation*. New York: The Guilford Press. pp. 259. 278. -
- Ryan, R. M., & Connell, J. P. 1989 Perceived locus of causality and internalization : Examining reasons for acting in two domains. *Journal of personality and Social Psychology*, **57**, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. 2000 Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 酒井 厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, **50**(1), 12-22.
- 桜井茂男 2009 自ら学ぶ意欲の心理学-キャリア発達の視点を加えて-有斐閣
- Satir, V. 1964 *Conjoint Family Therapy*. Palo Alto: Science & Behavior Books.
- 佐藤宏治・佐々木久長 2007 児童から見た「母親の父親観」と「父親イメージ態度」-20年前との比較 秋田大学医学部保健学科紀要, **15**(1), 28-35.
- Shulman, S., & Steiffge-Krenke, I. 1997 *Father-adolescent relationships: Developmental and clinical perspectives*. London:Routledge.
- 清水欽也 2007 理科成績を規定する家庭的要因の影響 国立教育政策研究所紀要, **136**, 77-90.
- 高柳東子 1994 児童の学習態度に対する親の介入と児童の動機づけ志向性との関係 東京大学教育学部紀要, **34**, 271-278.
- 竹村明子・小林稔 2008 小学生における親子関係と学習への動機づけの相関分析 琉球大学教育学部紀要, **73**, 215-224.
- 田中あゆみ・中野聖子 2008 親のもつ子どもの能力についての認識および能力観が子どもに与える影響について *Human Developmental Research*, **22** , 247-254.
- Thomas, A. & Chess, S. 1977 Temperament and Development Chapter 13 Brunner/Mazel, Inc 175-182.
- Wild, T. C., & Enzle, M. E 2002 Social contagion of motivational orientations. In E. L., Deci, & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of self-determination research*. New York: University of Rochester Press.
- Wigfield, A., Eccles, Y. J. S., Yoon, K. S., Harold, R. D., Arbreton, A. J. A., Freedman-Doan, C., & Blumenfield P. C. 1997 Change in children's competence beliefs and subjective task values across the elementary school years: A 3-year study. *Journal of Educational Psychology*,
- Williams, G. C., & Deci, E. L., 1996 Internalization of biopsychosocial values by medical students. A test of self-determination theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 767-779.

A Study on the Influence of Home Environment on Autonomous Motivation Toward Study in Junior High School Students: Focus on Father's Home Participation and Marital Relationship

KAZUO OGATA

Department of School Education, Aichi University of Education

This research aimed at considering the influence which the marital relationship based on a father's home participation has on a child's autonomous motivation toward study. 334 university students (mean age 19.22 years) completed questionnaires designed to investigate the relation among marital relationships, father's and mother's autonomous motivation to their children's study, autonomous support, children's motivational traits, and children's autonomous motivation toward study in their junior high school days. The data were analyzed using covariance structure analysis to examine the influence of home environment on autonomous motivation and following results were indicated. In the case of father, when marital relationship is good, father's autonomous motivation to children's study affected children's autonomous motivation toward study positively. Also father's autonomous motivation to their children's study affected children's motivational traits, and these traits affected children's autonomous motivation toward study positively. Furthermore marital relationships affected parent's support, they affected children's motivational traits and these traits affected children's autonomous motivation toward study positively. In the case of mother, the good marital relationship promoted autonomy support like a father's case, and it was also shown that it raises a child's motivation traits and autonomous motivation toward study.

From the above thing, it was shown that the marital relationship based on a father's home participation influences the autonomous motivation toward study in junior high school students.

Key words : autonomous motivation, father's involvement in family, marital relationship, junior high school students